

## From Houston with Love

The University of Texas  
MD Anderson Cancer Center

佐々木 裕哉

(久留米大学医学部病理学講座)

上原記念生命科学財団・リサーチフェローシップ助成のもと、テキサス大学 MD アンダーソンがんセンターに 2019 年度より留学をさせていただいております。白血科の高橋康一先生の研究室に所属し研究に励んでおります。

ゲノム医療の発展に伴い、白血病の分子病態の理解や新規治療法の開発は近年目覚ましく、世界各国がしのぎを削る領域です。所属研究室においては、この領域の最先端を経験することができ、とても勉強になっております。また、臨床試験を基にした新規治療法の開拓に携わりたいという将来の目標に向けても大変よい勉強の機会をいただいております。

当地にて最初に完成した仕事は、この両者に関わるものでした。具体的には、フィラデルフィア染色体陰性型 CD20 陽性急性リンパ性白血病に対するオファツムマブ併用 Hyper-CVAD 療法の効果を評価する単アーム phase II 試験に関する研究において、ゲノム解析全般に携わらせていただきました。初めての経験ばかりであり、解析にあたっては沢山の人の支えていただきました。本研究は主任研究員をはじめ関わられた人全員の熱意により、Lancet Haematology 誌に受理され、私自身は第 3 著者としてゲノム解析の側からエビデンスの構築に寄与させていただくという貴重な経験ができました。

現在は MD アンダーソンがんセンター内で治療を受けられたフィラデルフィア染色体陽性型急性リンパ性白血病患者さんの残余検体を使用させていただき、ゲノム解析を行うことでリスク分類を行い治療を最適化させるための研究を中心に行っています。この研究は 2019 年の米国血液学会で発表する機会を得ました。内容をさらに発展させ、自分の取り組みが未来の患者さんの予後を改善させることに少しでも寄与できるよう努めて参りたいと思います。そして、ここで得られた知識・技術を日本に持ち帰り、日本の医療水準の向上に少しでも寄与できればと願っております。

現在、妻と子 2 人と共にヒューストンで暮らしております。アメリカ生活は不慣れなことばかりで戸惑う毎日でしたが、日本人コミュニティに沢山支えていただき、最近はようやく心のゆとりができ、毎日楽しく過ごしております。子どもたちの成長を見るのが何よりの楽しみです。

留学の夢を叶えてくださった上原記念生命科学財団に厚く御礼を申し上げます。残りの留学期間も充実させたいと思います。

## ヒューストン留学記

Baylor College of Medicine  
中畠 賢吾  
(近畿大学医学部奈良病院小児外科)

2018年11月よりテキサス州ヒューストンのBaylor College of Medicineに留学させていただいております。ヒューストンはアメリカにおける石油・エネルギー産業の最大拠点都市ですが、同時に「テキサス医療センター」といわれる世界最大級の医療研究機関の集積地でもあり、Baylor College of Medicine およびテキサス小児病院、有名なMD アンダーソンがんセンターやUT Health など数多くの病院や大学、研究機関が巨大な医療地区を構成しています。

私の所属しているFaris D. Virani Ewing Sarcoma Centerは、その名前のとおり肉腫（ユーイング肉腫、骨肉腫、横紋筋肉腫）の治療やメカニズムを中心に研究しています。私のボスであるJason Yustein先生はp53遺伝子関連研究の大家であるLawrence Donehower先生とともにPIとして研究していましたが、ユーイング肉腫で闘病中のFarisくんというお子様を持つVirani家から多額のご寄付をいただき、2014年に設立されたFaris D. Virani Ewing Sarcoma Centerのセンター長として、Texas Children's Cancer Center（テキサス小児病院内）に拠点を移し独立しました。残念ながら2016年にFarisくんはお亡くなりになりましたが、現在もVirani家からのご支援は続いています。

私の研究テーマとして、この一年でHigh Throughput Screening（HTS：多数の化合物の中から、有用な生理活性を持つものを高効率で選抜する手法）を用いて、既存の抗癌剤や薬剤の中から横紋筋肉腫に効果のある薬剤を同定した後、これから動物実験を開始する予定でした。しかしご存知のとおり新型コロナウイルスの影響で3月中旬から大学のメインキャンパスが閉鎖され、子ども達の学校も休校になってしまいました。現在はあまり実験を進められない状況ですが、これまでのデータをもとに論文を執筆したり、慣れないremote workに取り組んでおります。未曾有の事態にアメリカで生活するのは不安ではありますが、このような状況でも勉強させていただけることもたくさんありますので、前向きに努力しようと思います。

最後になりましたが、今回の留学を快諾してくださいました大阪大学小児外科の奥山宏臣教授および近畿大学奈良病院小児外科の米倉竹夫教授に深く御礼申し上げます。またこのような貴重な留学経験をご支援いただきました上原記念生命科学財団の皆様にも心より感謝申し上げます。帰国後もこの経験を生かして日本での研究および臨床に貢献できるよう一生懸命精進いたしますので、今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。